酒呑童子に子供が…

（大江山伝説後日譚）

酒呑童子を退治した頼光は岩窟に捕えられていた婦女子をすべて解放したが、その中の美女「伊予椽経友」の奥方と伝えられる彼女は哀れにも狂人で、その上酒呑童子の子を宿し身ごもっていて故郷へ帰ることも出来ず雲原南島部落に住みついた。里人はこれを不びんに思い、食べ物を与えたり、不用の衣類を恵んだりしたという。やがて女は男の子を生んだ。これが西原文庫蔵書「府誌与謝郡之㈡㈢」に記るされた鬼童である。

鬼童は生れながらに歯はすべて生え揃い食物は何でも口に入れたという。七、八歳頃になると力は里の大人以上で、毎日山を駆け登り、いのしし、鹿など見つけ次第に石を投げてこれを捕り、肉をさいて食うという粗暴な振る舞いに村人はひどく恐れ近づく者もなくなった。

食べ物も恵まれず里人から見放された鬼童はいつの間

にかこの里から姿を消してしまった。その後都に出て頼光を父の敵としてその機をうかがっていた。或る日、市中の市原野という所で死んだ牛の腹にかくれ頼光を刺さんとしたが家臣に見破られその場で斬り殺されたといううわさがこの里にも伝わって来た。

其の頃鬼童の母は病気にかかって日々衰弱が激しく可愛想だと思う里人がこれまで以上に食べ物を運んだが、ついに回復することなくひっそりと死んでしまった。

鬼童が殺されてから百日たらずの事である。里人はこのなきがらを南島部落の小高い七曲りの畑の片隅に葬り山石を置き目印としてその傍に「サヤゴ」の苗木を植えた。

村人は日が経つにしたがって鬼童のことも狂女のことも忘れ去った。

目印にと植えた「サヤゴ」の苗木は薄原の中で大きく育ち狂女の墓石を包むかのように根を張り常緑樹は四囲を大きくおおった。里人はこれを狂女の精ではなかろうかと言い、狂女の美ぼうからこれを桜御前の墓と呼び時々供花や供物を持っていったという。

雲原川上老人クラブ　糸井一男（75歳）

語り継ぐ 福知山老人の知恵

平成 二年二月 発行
福知山市老人クラブ連合会

猫神様の話

今から五百年程昔の話である。私達が住んでいる南島部落に戦国時代に造られた京街道の道筋に迫田神社という小さなお宮さんがある。約五十年程前は大きな森であったが、農地改革により森が切り払われた。今では畑になってお宮さんは小さな祠になっている。これが猫神様で地元では年に一度のお祭もある。

江戸時代の初期に大変猫の好きな迫田さんと言う人がこの地に住んで毎日猫を我が子のように可愛がり猫と共に楽しく暮していた。或る日都から一人の侍が通り雲原の山を眺めながら昼食をしていた。その弁当の中に魚がのっておりその臭いをかぎつけた迫田さんの飼い猫が侍の弁当の魚を取って食べてしまった。侍は大変立腹し色々と詫びたが、許してもらえず迫田さんは遂に首をはねられてしまった。丁度その時旅人が通りかかり侍は血のついた刀を振りかざしながら逃げだした。今の小学校の近くの平野と言う場所の山陰にある小さな池でその刀を洗ったと言われ、今もその池がある。旅人が不憫に思い迫田さんの首をていねいに葬り、そこに小さな祠を建てた。これが迫田神社である。今でも猫が病気になればここに祈願すれば元気になると言う言い伝えがある。

雲原東部老人クラブ　木村　智恵子（69歳）

京都新聞　平十四年一月十三日

ものがたりと出会う

猫神様

南島祠（福知山市雲原）

大江山山系と三岳山に囲まれた福知山市最北端の雲原地区に、わずか十五戸、約五十人が暮らす南島の集落がある。人家をはずれ、雪を踏み分け山道を進むと、地元の人から「迫田さん」と呼ばれる小さな祠に差しかかる。

村の古老、木村政雄さん(六三)は「ここは昔、迫田神社というお宮さんがあったんですが、昭和初期ごろ森を切り開いた時、一緒に壊してしまったんですよ。今の祠は、戦後に建て直したものなんです」と振り返りながら、「迫田さん」にまつわる伝承を語り始めた。

江戸時代初期、村に「迫田さん」という猫好きの人が住んでいた。猫をわが子のようにかわいがり、大切にしていたが、ある日、通りがかりの渡世人が広げていた弁当の魚を猫が食べてしまった。怒ったのは渡世人、猫をかばおうとした迫田さんを無情にも刀で斬りつけ、首をはねた。哀れんだ村人たちが、その地に建てたのが「迫田神社」だったという。

ところで、「迫田さん」にはもう一つ別の物語もある。地元の人は「知りませんなー」と口をそろえるが、江戸時代の地誌書「丹後旧事記」の中で祠は、大江山の酒呑童子の子を宿した桜御前の墓の跡だったという説がある。この場合、呼び方は「桜さん」になるという。

南島の区長、曽根国義さん(六二)は「どっちの話が本当なのかよう分かりませんが、いずれにせよ地元にとっては昔からの大切な祠です」と、にこやかに話した。

桜御前　酒呑童子を討ち取った源頼光が、捕らわれていた婦女子を解放した時、記憶を失って一人雲原に住みついたのが桜御前だった。酒呑童子との間の子とされる鬼童子は、生まれながらに歯が生え、髪が長く、言葉も話したと伝わる。

いわれの多い南島の祠。雪に覆われた山際に建ち、ひっそりと集落を見守っている

地域総合ニュース

村民の死 哀れみ…

雲原村の与謝郡から天田郡編入経緯

「夢の七十余年　西原亀三自伝」より

編　者　北村敬直
発行所　平凡社

二　雲原村の天田郡編入

貴族院に運動　近衛公に知らる

わたしがまだ舞鶴軍港の仕事をしている時、おりおり村に帰って感じたことは、村の子供たちは尋常小学四年の課程を終わると、三里隔った加悦町の高等小学校へ、与謝峠の険を越えて通学するのであった。十一、二の子供にとってはとても無理なことで、ことに雪の深い冬の間は交通が途絶して通学はできない。したがって高等小学へ入学するもの少なく、このままでは村民の教育水準が低くなる一方で、将来のためまことに憂うべきことであった。

雲原村は昔から丹後の与謝郡に属していた。したがって高等小学校は同じ郡内でいちばん近い加悦へ行くのであった。ところが反対に南へ行けば丹波の天田郡金山村に高等小学校があって、同じく峠越えではあるが距離は一里である。そこでわたしは雲原村を与謝郡から離して天田郡に編入することにせねばいけないと思った。村内にも村尾吉之助氏など熱心な主唱者があった。しかし与謝郡はもちろんこれを好まないし、村内にも多少の反対者はあった。それを押し切って村内の議をまとめ、京都府の代議士野尻岩次郎氏によって議会へ請願の手続をとった。三十四年春の議会（第一五回帝国議会—編者注）で衆議院は難なく通過したが貴族院に難色があった。その運動のためわたしは久し振りに上京した。神鞭先生にたよって近衛貴族院議長にも会い東久世通禧伯以下七人の委員にも頼みこんだ。しかし委員の一人の宮本小市という人は、こうした案件を政府提出でなくただ民間の一方的な請願によって通過させては、将来に悪例を残すからいけないといって猛烈に反対し、通過は一時絶望と見られたのであるが、幸いに近衛議長が高等小学へ三里の険路を通学せねばならぬなどということは、聖代にあるまじきことである、一日も早く通過さすべきであると強く主張されたのでようやく通過し、雲原村は長い伝統を破って丹後から丹波に移り、与謝郡を離れて天田郡に編入されたのである。しかし宮本委員の説も十分道理のあることなので、その後与謝郡の野間村が竹野郡に編入を希望して雲原の手続をとったが、これは雲原の轍には行かず不成功に終わった。こんなことでわたしは近衛公にも接近することができて、公を首領とし、神鞭先生・陸実氏などによって画策推進されたロシア・朝鮮・支那に対する外交問題について、その謀議にあずかり、微力をいたすことになったのである。